

## 乳児の心的状態の読み取りに関する研究

—VTR 刺激の開発と妥当性の検証—<sup>1)</sup>

島 義弘<sup>2) 3)</sup> 小原倫子<sup>4)</sup> 小林邦江<sup>4)</sup> 上嶋菜摘<sup>5)</sup>

### 問題と目的

養育者（以下、母親）が子どもの心的状態をどのように認知するかは、その後の母子相互作用に多大な影響を与える。本研究では、母親による乳児の心的状態の読み取りを捉え、読み取った心的状態が母子相互作用にどのように利用されるのか、また、何を手がかりとして心的状態を読み取っているのかを検討するための道具としてのVTR刺激を作成し、その妥当性を検証することを目的とする。

これまでの母子相互作用の研究では、子どもの心的状態を読み取り、適応的な相互作用につなげる養育者側の心理的側面として Maternal Sensitivity (Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall, 1978), Emotional Availability (Emde & Sorce, 1983), Reflective Function (Fonagy & Target, 1997), Mind-Mindedness (Meins, 1997), Insightfulness (Oppenheim & Koren-Karie, 2002) など、様々な概念が提唱されてきた。これらの概念には細かな違いはあるものの、適応的な母子相互作用には、母親が子どもの心的状態を的確に読み取り、適切かつ敏感に応答することが重要であることを強調している。

これまで、子どもの心的状態の読み取りの測定には大

別して2つの方法が用いられてきた。1つは母子相互作用の観察など、自子との関係において実施されるものであり、1つは写真や音声など統制された刺激に対する反応を求めるものである。このうち、自子との関係において測定される、母親による子どもの心的状態の読み取りは、必然的に子どもの特性をも含んだものとなり、母親個人の特性や傾向を抽出するのは困難になる。一方、統制された刺激を用いる手法では母親に対して限られた情報から乳児の心的状態の読み取りを強いることになり、日常的に行われている心的状態の読み取りとの解離が懸念される。

これらの問題点を克服するために、統制され、かつ日常的な文脈に根ざした刺激の作成が求められる。自子ではない乳児のビデオ刺激を用いても、母親による子どもの心的状態の読み取りを測定することは可能であり（篠原, 2006）、母親が子どもの心的状態を読み取る際には子どもの表情だけでなく周囲の文脈情報も手掛かりとして多く利用されている（Kamel & Dockrell, 2000）ことから、本研究では（1）自子以外の乳児で構成されていること、（2）表情に限定せず、乳児の全身および周囲の状況を含んでいること、という2つの条件を満たしたVTR刺激を作成し、その妥当性を検証することを目的とする。なお、自子とVTR刺激の乳児の月齢が同じ場合と異なる場合で、心的状態の読み取りに差異が生じる可能性も考えられるため、複数月齢でVTR刺激を作成する。

### 調査1：VTR刺激の作成

#### 方法

**ビデオクリップの作成** 3, 6, 9, 12ヶ月齢の乳児を、家庭もしくは保育室において撮影した。撮影の対象となったのは各月齢4名ないし5名であり、男女はおよそ半数ずつであった。ビデオの中から乳児の情動状態がポジティブ、ネガティブ、もしくはニュートラルであると考えられる場面を抜き出し、15秒のクリップを、各月齢20本ずつ作成した。各月齢の中では、同一乳児のビデオクリップは4本から6本であった。

- 1) 本研究は第2著者に対する文部科学省平成20年度科学研究費補助金（基盤研究（C）, 課題番号：20530614）の助成を受けて実施されたものである。
- 2) 本研究の実施にあたり、すすくこどもクリニックの神谷裕文院長はじめスタッフの皆様、犬山市子育て支援センターの鈴木園枝センター長はじめスタッフの皆様、もみじ保育園の水野照久園長はじめスタッフの皆様にご協力をいただきました。記して感謝いたします。
- 3) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科大学院研究生（指導教員：氏家達夫教授）
- 4) 愛知江南短期大学
- 5) 日本学術振興会（名古屋大学）

Table 1 調査1に参加した母親の人数, 平均年齢, および子どもの数

	n	年齢		子どもの数		
		M	SD	M	SD	Max
3ヶ月	31	31.1	(3.7)	1.3	(0.6)	3
6ヶ月	25	31.4	(3.8)	1.2	(0.5)	3
9ヶ月	37	32.6	(3.4)	1.3	(0.5)	2
12ヶ月	39	32.3	(3.8)	1.3	(0.6)	4

調査対象者 乳幼児を持つ母親127名を対象とした。調査対象者は3, 6, 9, 12ヶ月齢のVTR刺激のうち、いずれか1つ(20クリップ)を視聴し、質問紙に回答した。127名の内訳と属性についてはTable 1を参照されたい。

手続き 2008年12月から2009年1月にかけて、育児支援センターにおいて、活動終了後に調査協力を求めた。ビデオクリップはスクリーンに映写され、10名から30名が同時にビデオクリップを視聴した。調査協力者は3, 6, 9, 12ヶ月のいずれかの月齢の乳児が写るビデオクリップ20本を見て、それぞれについて“乳児の情動状態”を“快”と“不快”を両極とする7件法で評定を行った。

## 結果と考察

評定結果 3, 6, 9, 12ヶ月のビデオクリップに対する“快-不快”評定をTable 2に示した。Table 2から、いずれの月齢においても、20クリップの中には快から不快まで幅広い情動が含まれていることが確認された。

ビデオクリップの選定 各月齢20クリップの中から5クリップずつを抜き出し、VTR刺激を作成した。選定の基準は、各月齢について(1)強い快と強い不快が1クリップずつ含まれること、(2)3クリップはニュートラルなものであり、評定値の分散が小さいもの(誰が見てもニュートラル)と分散が大きいもの(ポジティブと評定する人もいればネガティブと評定する人もいるもの)が含まれること、(3)同一の乳児が3クリップ以上含まれないこと、であった。

以上の基準に従い、各月齢5クリップずつを選定した(Table 2)。3ヶ月齢はNo.4, No.5, No.8, No.12, No.16, 6ヶ月齢はNo.8, No.12, No.13, No.14, No.16, 9ヶ月齢はNo.8, No.11, No.13, No.14, No.15, 12ヶ月齢はNo.2, No.6, No.11, No.19, No.20であった。各クリップの特徴をTable 3に示した。

ビデオクリップの呈示順序 各月齢5クリップを、(1)快、(2)ニュートラル、(3)不快、(4)ニュートラル、(5)ニュートラルの順に並べた。この際、同一乳児のクリップが連続して呈示されないように配慮した。各月齢のクリップの呈示順序はTable 3を参照されたい。

## 調査2: VTR刺激の妥当性の検証

調査1で作成したVTR刺激の妥当性を検証するための調査を行った。母親による子どもの内的状態の読み取りの個人差を調べるための道具としてVTR刺激が利用可能であることを確認するため、以下の3点を検討することを目的とした。

(1) 調査1で作成されたVTR刺激が幅広い年齢・育児経験を持つ母親に適用可能であることを確認するために、本調査では多様な育児経験を持つ母親と、育児経験のない女子青年を対象として調査を行った。

(2) VTR刺激から読み取られる“快-不快”情動はMaternal SensitivityやMind-Mindednessといった評定者自身の内的特性と関連することが予想される。本研究では子どもの心的状態の読み取りに関わる評定者自身の内的特性として共感性を取り上げて検討した。共感性が低い人は顕著な“快-不快”情動の読み取りは可能だがあいまいな情動の認知には困難があり、共感性の高い人はあいまいな情報からでも乳児の情動を読み取ることができるとする。したがって、ポジティブもしくはネガティブな刺激に対する評定は共感性の高さとは関連せず、ニュートラルな刺激に対する評定は共感性と関連することが予測される。

(3) VTR刺激から読み取られる“快-不快”情動は評定者が持っている、乳児に対する一般的な感情が反映されたものではない。本研究では対見感情尺度を用い、“快-不快”情動が対見感情に影響されないことを確認する。

## 方法

調査対象者 母親サンプルは育児支援センターで、23名を対象に調査を行った。平均年齢は32.0歳( $SD=3.6$ )であった。女子青年サンプルは東海地区の短期大学生68名を対象とした。平均年齢は18.7歳( $SD=2.3$ )であった。

VTR刺激 調査1で作成した、3, 6, 9, 12ヶ月齢の乳児のVTR刺激を使用した。VTR刺激は各月齢5クリップずつで構成され、1クリップは15秒であった。3ヶ月齢のビデオクリップから順に呈示し、“乳児の情動状態”

資 料

Table 2 各月齢のビデオクリップに対する“快-不快”の評定結果

	3ヶ月				6ヶ月				9ヶ月				12ヶ月			
	M	SD	Min	Max	M	SD	Min	Max	M	SD	Min	Max	M	SD	Min	Max
No.1	5.27	1.20	2	7	4.72	1.34	2	7	5.00	1.51	1	7	5.69	0.87	3	7
No.2	5.28	1.03	4	7	5.76	1.20	3	7	2.88	1.63	1	7	<b>3.85</b>	<b>0.76</b>	<b>2</b>	<b>6</b>
No.3	5.37	1.61	1	7	6.32	1.18	3	7	6.00	0.98	4	7	5.30	1.45	1	7
No.4	<b>6.23</b>	<b>1.01</b>	<b>4</b>	<b>7</b>	3.17	0.76	2	4	5.36	0.99	3	7	4.44	0.99	2	6
No.5	<b>4.24</b>	<b>1.30</b>	<b>1</b>	<b>7</b>	5.88	1.05	4	7	4.42	0.91	3	7	5.44	1.02	3	7
No.6	5.28	1.16	3	7	2.00	0.82	1	4	2.83	1.28	1	7	<b>1.47</b>	<b>0.61</b>	<b>1</b>	<b>3</b>
No.7	3.97	1.38	1	6	4.92	1.10	3	7	4.60	1.22	2	7	4.81	1.06	3	7
No.8	<b>3.55</b>	<b>1.33</b>	<b>1</b>	<b>6</b>	<b>4.12</b>	<b>1.48</b>	<b>1</b>	<b>7</b>	<b>1.09</b>	<b>0.28</b>	<b>1</b>	<b>2</b>	5.00	1.04	3	7
No.9	1.41	0.78	1	4	5.80	1.26	3	7	4.94	1.29	1	7	4.49	0.85	3	7
No.10	5.97	1.12	4	7	4.52	1.19	3	7	4.75	0.97	3	7	3.12	1.34	1	6
No.11	4.96	0.85	4	7	4.52	1.19	3	7	<b>4.44</b>	<b>0.88</b>	<b>3</b>	<b>7</b>	<b>6.43</b>	<b>0.93</b>	<b>3</b>	<b>7</b>
No.12	<b>4.89</b>	<b>0.74</b>	<b>4</b>	<b>6</b>	<b>4.08</b>	<b>0.95</b>	<b>2</b>	<b>7</b>	4.97	1.19	3	7	2.46	1.04	1	5
No.13	3.57	1.20	1	6	<b>4.20</b>	<b>0.87</b>	<b>3</b>	<b>6</b>	<b>3.77</b>	<b>0.97</b>	<b>2</b>	<b>7</b>	4.63	1.03	3	7
No.14	3.93	1.27	2	7	<b>6.44</b>	<b>0.51</b>	<b>6</b>	<b>7</b>	<b>4.21</b>	<b>1.04</b>	<b>2</b>	<b>7</b>	2.00	0.82	1	4
No.15	5.31	1.57	1	7	6.60	0.65	5	7	<b>6.49</b>	<b>0.92</b>	<b>4</b>	<b>7</b>	2.50	1.22	1	5
No.16	<b>1.46</b>	<b>0.99</b>	<b>1</b>	<b>5</b>	<b>1.40</b>	<b>1.04</b>	<b>1</b>	<b>6</b>	4.38	1.04	2	7	4.66	1.26	1	7
No.17	1.42	0.86	1	4	5.24	0.83	4	7	3.51	1.04	2	6	5.58	1.09	3	7
No.18	5.77	0.91	4	7	6.24	0.97	4	7	5.06	1.11	3	7	4.42	1.03	3	7
No.19	4.76	1.30	2	7	5.48	1.19	4	7	4.66	0.91	3	7	<b>4.56</b>	<b>0.80</b>	<b>3</b>	<b>6</b>
No.20	4.77	1.14	2	7	4.64	1.50	1	7	4.39	0.73	3	6	<b>4.50</b>	<b>1.00</b>	<b>2</b>	<b>7</b>

注) 最終的に選択された各月齢5クリップを枠で囲んだ

Table 3 3, 6, 9, 12ヶ月齢の、選択された5クリップの特徴と呈示順序

	3ヶ月	6ヶ月	9ヶ月	12ヶ月
1. 快	No.4 母親のひざの上に、仰向けで寝かされる。お腹をくすぐられて「アー、ウー」と発声する。	No.14 うつ伏せから胸を上げる。手に持った帽子を操作し、カメラに笑顔を向ける。	No.15 床に座り、両手に持ったおもちゃをぶつけて音を出す。笑顔だが、ほとんど発声はない。	No.11 シャがんだ姿勢から、カメラを見上げて立ち上がり、笑顔で短く発声する。その後、走り出す。
2. ニュートラル	No.5 マットの上で、仰向けに寝ている。目の前にぶら下がっているおもちゃと横を交互に見ている。	No.8 揺れているベビチェアに仰向けに寝ている。「アー」と発声する。無表情。	No.14 四這いで、床に置いてあるおもちゃを操作する。その後、這い這いで少し移動する。発声はない。	No.2 床に腹這いになり、胸を上げた姿勢を保持。片足をリズムカルに動かす。声をかけられてカメラの方を向く。
3. 不快	No.16 ベビーベッドの中で、一人仰向けに寝ている。泣きながら手足をバタつかせ、腕を口に入れる。	No.16 うつ伏せで胸を上げる。その後顔を床に付け、「ウッ、ウッ、ウッ」と泣く。	No.8 床に座り、激しく泣く。手足をバタつかせる。	No.6 床に仰向けになり、泣きながら、両手を宙に差し出したり、目をこすったりしている。
4. ニュートラル	No.12 母親に抱っこをされて、壁にかかっているおもちゃを見ている。指を口に入れる。	No.13 床に仰向けに寝ている。手に持ったハンドタオルを振り回す。発声・表情ともになし。	No.13 床に座り、おもちゃやカメラを凝視する。身体動作・発声ともになし。	No.20 床に座り、両手で食べ物に触り続ける。口には持っていない。冒頭に短い発声があるが、その後は無言。カメラにも視線を向けない。
5. ニュートラル	No.8 ベビーベッドの中で一人仰向けに寝ている。無表情で、特に動きもない。	No.12 うつ伏せで胸を上げた姿勢を保持。発声・表情ともになし。	No.11 床に座って、服の紐を握り、口に入れようとする。発声はない。	No.19 床に座り、はめ込み型のおもちゃを操作する。途中で短い発声があるが、カメラに視線を向けない。

について、“快”と“不快”を両極とする7件法で評定を求めた。

質問紙 (1) 共感性：鈴木・木野 (2008) の多次元共感性尺度の中から、他者に向けられた情緒反応を測定する“他者指向的反応”と、相手の立場から他者を理解しようとする認知傾向である“視点取得”の2因子、計10項目を用いた。評定は“全く当てはまらない”から“とてもよく当てはまる”までの5件法であった。

(2) 対児感情：長谷川・戸田 (2006) の対児感情尺度を、育児中の母親に対しては不適切であると判断された1項目を除いて用いた。評定は“当てはまらない”から“当てはまる”までの7件法であった。

手続き 2009年6月から7月にかけて、母親サンプルは育児支援センターの活動終了後に、女子青年サンプルは講義時間を利用して、調査を実施した。調査では、最初にVTR刺激の評定を行い、その後、共感性と対児感情への回答を求めた。

## 結果と考察

尺度得点の算出 共感性 (10項目) について主成分分析を行ったところ、1因子 ( $\alpha = .83$ ) であることが確認されたため、逆転項目を処理して加算し、共感性得点を求めた。なお、母親と女子青年で共感性得点に有意差はなかった (Table 4)。

対児感情についてはポジティブ感情 (16項目)、ネガティブ感情 (17項目) のそれぞれについて主成分分析を行った。その結果、ポジティブ感情、ネガティブ感情のいずれも1因子であることが確認されたが、ポジティブ感情では第1主成分への寄与が小さい1項目を削除した場合に信頼性の上昇が認められたため、当該項目を削除した (ポジティブ感情： $\alpha = .84$ 、ネガティブ感情：

$\alpha = .90$ )。ポジティブ感情、ネガティブ感情ともに評定値を単純加算し、ポジティブ感情得点、ネガティブ感情得点を算出した。母親と女子青年の間には、ポジティブ感情得点、ネガティブ感情得点ともに有意差はなかった (Table 4)。

VTR刺激の評定値 VTR刺激の評定値の分析には、2つの調査の母親の評定に差がないことも確認するため、調査1の母親の、該当するクリップに対する評定も合わせて検討した。調査1の母親と調査2の母親および女子青年の、各ビデオクリップに対する評定値の平均と標準偏差をTable 5に示した。Table 5から、全体的には調査2の母親の評定値がやや高く、ポジティブな方向に偏る傾向が見られた。しかし、概ねポジティブ刺激に対する評定値は6以上、ニュートラル刺激には3.5-4.5、ネガティブ刺激には2未満という結果が得られており、VTR刺激から読み取られる乳児の感情価は育児経験には左右されるものではないと考えられる。

共感性 母親と女子青年とで共感性得点に差がなかったため、両者を合わせて分析を行った。共感性得点を中央値で折半し (高群39名、低群44名)、VTR刺激全20クリップに対する評定値を従属変数としたMANOVAを行ったところ、Table 6に示したように、4クリップに有意差が見られた。ただし、この4クリップの内訳はポジティブ1、ネガティブ1、ニュートラル2であり、共感性の高低がニュートラル刺激の評定に影響を与えるという本研究の予測を支持するものではなかった。原因として、本研究で使用した多次元共感性尺度が乳児の心的状態との関連を捉えるには適していない可能性が考えられる。現時点では共感性を始め、Maternal SensitivityやMind-Mindednessなどの諸概念を測定する質問紙が開発されていないため、既存の尺度を使用したのが、乳児の情動の読み取りという文脈に即して内的特性を測定する尺度の開発した上で、再検討が必要であると考えられる。

対児感情 対児感情についても母親と女子青年の間には差がなかったため、以下の分析は両者を合わせて行った。

ポジティブ感情得点を中央値で折半し (高群36名、低群42名)、VTR刺激全20クリップに対する評定値を従属変数としたMANOVAを行ったところ、5クリップに有意差が見られた (Table 6)。また、ネガティブ感情得点についても同様に中央値で折半して (高群38名、低群43名) MANOVAを行ったところ、3クリップに有意差が見られた (Table 6)。以上の結果から、VTR刺激に対する評定は、ポジティブな対児感情からは若干の影響を受けるものの、ネガティブな対児感情からはほとんど影響を受けないことが示された。したがって、VTR刺激から読み取られる乳児の“快-不快”感情は評定者が持つて

Table 4 調査2における女子青年と母親の共感性得点 (SD)、対児感情得点 (SD)

	母親	女子青年	<i>t</i>	
			( <i>df</i> )	
共感性	23.7 (5.0)	24.4 (4.1)	0.65 (87)	<i>n.s.</i>
対児感情				
ポジティブ <sup>1)</sup>	93.7 (9.4)	98.1 (6.5)	1.99 (26.8)	†
ネガティブ <sup>1)</sup>	44.6 (20.8)	35.0 (13.3)	2.04 (27.1)	†

†  $p < .10$

1) 等分散の仮定が棄却されたため、Welchの方法を用いた。

資 料

いる、子どもに対する一般的な感情によってバイアスのかけられたものではなく、真にVTR刺激によって誘発されたものであるという仮定は概ね支持された。

Table 5 VTR 刺激に対する評定値の平均と標準偏差

	母親 (調査1)			母親 (調査2) (n = 25)		女子青年 (n = 68)	
	n	M	SD	M	SD	M	SD
3-1	30	6.23	(1.01)	6.38	(0.65)	5.60	(1.07)
3-2	29	4.24	(1.30)	4.37	(0.77)	3.85	(0.87)
3-3	26	1.46	(0.99)	1.25	(1.03)	1.41	(0.87)
3-4	28	4.89	(0.74)	4.87	(1.01)	4.60	(0.87)
3-5	29	3.55	(1.33)	3.96	(1.00)	3.59	(1.08)
6-1	25	6.44	(0.51)	6.39	(0.66)	6.04	(0.85)
6-2	25	4.12	(1.48)	3.87	(1.25)	4.16	(1.00)
6-3	25	1.40	(1.04)	2.33	(1.40)	1.71	(1.07)
6-4	25	4.20	(0.87)	4.71	(1.00)	3.79	(0.76)
6-5	25	4.08	(0.95)	4.67	(0.87)	4.10	(0.67)
9-1	35	6.49	(0.92)	6.68	(0.69)	6.75	(0.82)
9-2	34	4.21	(1.04)	4.43	(0.95)	3.91	(1.16)
9-3	35	1.09	(0.28)	1.36	(1.15)	1.06	(0.24)
9-4	35	3.77	(0.97)	4.00	(0.93)	3.71	(0.55)
9-5	36	4.44	(0.88)	4.80	(1.12)	4.09	(0.96)
12-1	37	6.43	(0.93)	6.54	(0.66)	6.57	(0.74)
12-2	33	3.85	(0.76)	4.76	(1.01)	4.54	(0.84)
12-3	34	1.47	(0.62)	1.56	(1.19)	1.50	(0.87)
12-4	36	4.50	(1.00)	4.64	(0.86)	4.32	(0.72)
12-5	32	4.56	(0.80)	5.35	(1.03)	5.10	(0.95)

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

1) 等分散の仮定が棄却されたため、Welchの方法を用いた。

Table 6 共感性, 対児感情 (ポジティブ, ネガティブ) と VTR 刺激に対する評定値の関連

		3-1	3-2	3-3	3-4	3-5	6-1	6-2	6-3	6-4	6-5
共感性	H (n = 39)	5.77	3.95	1.36	4.92 *	3.74	6.26 †	4.33 †	1.49 **	3.90	4.23
	L (n = 44)	5.66	3.93	1.43	4.48	3.57	5.91	3.86	2.34	4.09	4.18
対児感情 (P)	H (n = 36)	5.67	3.97	1.22 †	4.81	3.53	6.31 *	4.36 *	1.69	3.97	4.25
	L (n = 42)	5.81	3.98	1.55	4.55	3.79	5.90 *	3.86 *	2.12	4.00	4.17
対児感情 (N)	H (n = 38)	5.76	3.87	1.34	4.58	3.47	5.97	3.87 †	2.05	4.03	4.00 *
	L (n = 43)	5.72	4.05	1.47	4.84	3.84	6.14	4.33	1.74	3.98	4.33
		9-1	9-2	9-3	9-4	9-5	12-1	12-2	12-3	12-4	12-5
共感性	H	6.85	4.26 †	1.08	3.82	4.44	6.74 *	4.74 *	1.44	4.51	5.38 †
	L	6.59	3.77	1.16	3.66	4.11	6.41	4.36 *	1.59	4.30	5.00
対児感情 (P)	H	6.92 †	4.06	1.06	3.89 *	4.03	6.81	4.81 *	1.39	4.42	5.28
	L	6.57	3.93	1.19	3.62	4.36	6.38 **	4.33 *	1.64	4.33	4.93
対児感情 (N)	H	6.63	3.84	1.11 *	3.63 *	4.13	6.55	4.39 †	1.55	4.29	5.03
	L	6.79	4.12	1.14	3.88	4.37	6.60	4.72	1.51	4.44	5.16

H: 高群, L: 低群

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , † $p < .10$

## 総合考察

本研究では、母親による乳児の情動認知や母子相互作用の研究に利用可能なVTR刺激の作成とその妥当性の検証を目的として、2つの調査を行った。調査1では3, 6, 9, 12ヶ月齢の、自子以外の乳児の全身および周囲の状況を含んだビデオクリップを作成し、各クリップに対する評定結果から各月齢5クリップずつを選定した。

続いて、調査2で共感性、対児感情との関連をもとに妥当性の検証を行った。その結果、VTR刺激に対する評定は一般的な対児感情（特にネガティブな対児感情）とは関連しないことが概ね示され、弁別妥当性が確認された。したがって、VTR刺激に対する評定はその刺激から読み取られた乳児の心的状態を反映したものであると言える。

一方、本研究では従来の母子相互作用研究において重視されてきた母親の心理的側面の1つである共感性とVTR刺激に対する評定の関連を検討したが、有意な結果は得られず、収束妥当性は確認されなかった。先述のとおり、Maternal SensitivityやMind-Mindednessなどの母親の内的特性を測定する利用可能な質問紙は現存しない。本研究ではVTR刺激開発を第1の目的としたため、尺度は既存のものを用いたが、適当な尺度を開発した上で、収束妥当性については再度の検証が必要であろう。

以上のように、本研究で作成したVTR刺激には収束妥当性の確認という点では若干の問題が残ったが、概ね所期の目的は達せられたものと考えられる。今後は、育児中の母親に対する面接データと合わせて、母親は何に注目して子どもの心的状態を読み取っているのか、読み取られた心的状態やその他の情報がどのように利用されて母子相互作用行動に結びついていくのか、これらの認知や行動は親自身や子どもの発達とどのように関連するのかなど、乳児の情動認知や母子相互作用についての研究の全般にわたるリサーチ・クエスチョンの解明のために利用していきたい。

## 引用文献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Emde, R. N., & Sorce, J. F. (1983). The rewards of infancy: Emotional availability and maternal referencing. In J. D. Coll, E. Galenson, & R. L. Tyson (Eds.), *Frontiers of Infant Psychiatry*. New York: Basic Books.
- Fonagy, P., & Target, M. (1997). Attachment and reflective function: Their role in self-organization. *Development and Psychopathology*, 9, 679-700.
- 長谷川香奈・戸田弘二 (2006). 乳児の情緒的反応に対する内的作業モデルの影響 学校臨床心理学研究 (北海道教育大学大学院研究紀要), 4, 101-117.
- Kamel, H., & Dockrell, J. E. (2000). Divergent perspectives, multiple meanings: A comparison of caregivers' and observers' interpretations of infant behavior. *Journal of Reproductive and Infant Psychology*, 18, 41-60.
- Meins, E. (1997). *Security of attachment and the social development of cognition*. East Sussex, UK: Psychology Press.
- Oppenheim, D. & Koren-Karie, N. (2002). Mothers' insightfulness regarding their children's internal world: The capacity underlying secure child-mother relationships. *Infant Mental Health Journal*, 23, 593-605.
- 篠原郁子 (2006). 乳児を持つ母親における mind-mindedness 測定方法の開発—母子相互作用との関連を含めて— 心理学研究, 77, 244-252.
- 鈴木有美・木野和代 (2008). 多次元共感性尺度 (MES) の作成—自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて— 教育心理学研究, 56, 487-497.

(2009年11月15日受稿)

## ABSTRACT

A Study on Mothers' Cognition of Infants' Emotion:  
Development of the VTR Stimulus and Its Validity

Yoshihiro SHIMA, Tomoko OBARA, Kunie KOBAYASHI and Natsumi UESHIMA

To investigate maternal emotional cognition and mother-infant interaction, we developed a VTR stimulus and examined its validity. In study 1, participants were 127 mothers who have infant(s) and/or toddler(s). They were shown 20 video clips and asked to evaluate the emotional states of infants. The video clips they were presented were consisted of 3-, 6-, 9-, or 12-months-old infants, and each clip was 15-seconds-long. Then we developed the VTR stimulus by selecting 5 clips from each group of infants' month according to the rated scores. In study 2, the validity of the VTR stimulus was tested. Participants were 68 female adolescents and 28 mothers who have infant(s) and/or toddler(s). The rated scores of every 20 clips were compared by the empathy and general representations-on-infants, and few significant differences were obtained. The convergent and discriminant validity were discussed for future study.

Key words: emotion cognition, the VTR stimulus, validity, mothers, infants